

石川県埋蔵文化財情報

第 30 号

巻頭図版（千野遺跡、金沢城跡）

平成24年度の発掘調査から 所長 福島 正実…(1)

発掘調査略報

七尾城跡（七尾市） (4)

古府・国分遺跡（七尾市） (6)

千野遺跡（七尾市） (8)

福井ナカミチ遺跡（志賀町） (10)

直江北遺跡、大友E遺跡（金沢市） (12)

金沢城跡（金沢市） (14)

下新庄フルナワシロ遺跡（野々市市） (16)

二日市イシバチ遺跡（野々市市） (18)

宮保B遺跡（白山市） (20)

平成24年度下半期の出土品整理作業 (22)

調査研究

西日本への浮線文土器と舟形土器・容器の波及 久田 正弘…(25)

2013年9月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

千野遺跡

能登国分寺跡・七尾湾を望む（南東から）

遺跡は七尾城山から西へのびる標高28m前後の低丘陵の先端部に立地し、弥生時代の集落および墓、古墳時代から平安時代の集落を確認した。丘陵からは蒼く広がる七尾湾が望め、邑知地溝帯を挟んだ西側の丘陵上に細口源田山遺跡や国分尼塚古墳群が、東側の丘陵上には古府タブノキダ遺跡が、平安時代には眼下の沖積低地で能登国分寺が望める立地上に集落が営まれており、往時の景色が偲ばれる。

方形周溝墓（周溝墓201）完掘状況（北から）

方形周溝墓は平成23年度調査区で検出したものを含め2基を確認している。いずれも丘陵の先端に造営されており、周溝からは弥生時代中期後半の土器が出土した。平成24年度調査では、墳丘部で埋蔵施設を3基検出し、木棺痕跡を確認している。七尾市東部丘陵における当該期の墳墓の確認は本遺跡が初めてであり、墓地造営の様相把握など、今後検討を加えていきたい。



能登国分寺跡・七尾湾を望む（南東から）



方形周溝墓（周溝墓201）完掘状況（北から）

写真解説

金沢城跡

調査区遠景（第3・4面 北から）

金沢市広坂2丁目地内に所在し、金沢城の外郭の一部「堂形」と呼ばれる地点である。中世末～江戸初期に属する南北方向の区画溝(SD01)、その東側に古代の掘立柱建物の柱穴などを検出した。(左上の建物は、石川県しいのき迎賓館)。

区画溝(SD01)（第3面 北から）

幅約3m、深さ約1m、南北約18mを検出した。木製品（漆器碗や箸、折敷、下駄など）、陶磁器、土師器皿、瓦などが出土している。



調査区遠景（第3・4面北から）



区画溝（SD01）（第3面 北から）

平成24年度の発掘調査から

所長 福島 正実

1 はじめに

財団法人石川県埋蔵文化財センターは、平成24年度に石川県教育委員会から12件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省が3件、鉄道・運輸機構1件、県企画振興部1件、県環境部1件、県土木部5件、県教育委員会事務局1件であった。

本号では平成24年度に当法人が実施した発掘調査のうち、本誌第29号で紹介した5件、7遺跡以外の概要を紹介する。また、石川県金沢城調査研究所および県内市町が実施した主な発掘調査の概要も紹介する。

2 (財)石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

七尾城跡(七尾市)では戦国時代の城下町の調査を継続しており、古屋敷町地内で竪穴状遺構や土坑、井戸を確認し、土師皿、陶磁器、るつぼ等の鍛冶関連遺物が出土した。古府・国分遺跡(七尾市)は奈良・平安時代、中世の集落跡であり、能登国分寺跡北側の調査区域で掘立柱建物、井戸、堀跡や中世の道路側溝と考えられる溝を確認した。千野遺跡(七尾市)は能登国分寺跡の南方約1kmに位置し、弥生時代中期の竪穴建物や、埋葬施設の残る方形周溝墓、古墳時代前・中期の竪穴建物、奈良・平安時代の掘立柱建物や大型の土坑などを確認した。

福井ナカミチ遺跡(志賀町)は弥生時代、奈良・平安時代の集落跡で、前年度に引き続き調査を行った。奈良・平安時代では掘立柱建物や、人面墨書を含む墨書土器が出土した溝を確認した。弥生時代では土坑、溝を確認した。

直江北遺跡(金沢市)では弥生時代後期から古墳時代の溝などを確認した。また、縄文時代晩期の土器も出土したが、該期の遺構は確認されなかった。大友E遺跡(金沢市)は弥生時代から平安時代の集落跡であり、金沢市埋蔵文化財センターの大規模な調査の隣接地で、前年度に引き続き調査を行った。川跡からは弥生時代から古墳時代の土器、木製品が出土し、このほか柱穴、土坑、井戸を確認した。金沢城跡(金沢市)では堂形と呼ばれる外郭部で、平成19,20年度調査区の隣接地の調査を行い、近世の石列、石組み、中世末から近世初めの区画溝、土坑、古代の柱穴などを確認した。

下新庄フルナワシロ遺跡(野々市市・金沢市)は古墳、奈良・平安時代の集落跡であり、野々市市側の調査が追加され、竪穴建物、溝、土坑などを確認した。二日市イシバチ遺跡(野々市市)では弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴建物、掘立柱建物など、中世の掘建柱建物、区画溝などを確認した。

宮保B遺跡(白山市)は中世の集落遺跡である。平成21,22年度調査区域の隣接地において、竪穴状遺構、掘建柱建物、堀などを確認した。土師器、陶磁器、砥石、箸などが出土した。

なお、上記調査以外の能瀬南B遺跡(津幡町)、加茂窯跡群(津幡町)、二ツ寺遺跡(金沢市)、小立野ユミノマチ遺跡(金沢市)、下新庄フルナワシロ遺跡(金沢市)長池カチジリ遺跡(野々市市)、長池ニシタンボ遺跡(野々市市)の本年度調査の概要については本誌第29号を参照されたい。

3 石川県金沢城調査研究所が実施した調査

金沢城跡(金沢市)で、城内最大の枳形門である橋爪門の復元整備、池泉を伴う大規模な庭園である玉泉院丸庭園の整備計画策定のための確認調査が継続して行われている。橋爪門ではこれまでに二

ノ門の礎石痕跡、二ノ門地下の石組み暗渠（排水溝）と溜榭、敷石痕跡が確認されており、平成24年度は石組暗渠の延長、石垣台および枳形路面の一部が確認された。玉泉院丸ではこれまでの確認調査によって、池の護岸、中島、出島、滝を伴う石組み（滝石組）、色紙短冊積石垣下の滝壺などが確認されており、平成24年度は滝壺の全体構造、滝石組上部の構造と流路、石垣の創建時期などが確認された。

4 市町が実施した主な調査

珠洲市は寺家錦戸ムカイバタケ遺跡の調査を行い、古代の土器製塩炉や製塩土器が出土した。

能登町は真脇遺跡の第二期史跡整備に向けた確認調査を行い、縄文時代晩期の木柱根や掘立柱建物が確認された。

七尾市は般若野カンノンマエ遺跡で中世の集落跡の縁辺部の調査を行ったほか、同市竹町地内の七尾城跡で中世の溝、土坑などを確認し、七尾城関連遺跡の周縁部とした。また、万行遺跡で遺跡西端部の確認調査を行い、旧地形や中世以降の造成跡を確認した。

金沢市は大友A遺跡、大友E遺跡、大友F遺跡、大友G遺跡、松根城跡、長家上屋敷跡、金沢城下町遺跡などの調査を行った。大友遺跡群は同市北西部の沖積平野に立地し、概ね弥生時代から中世にかけての集落跡である。大友A遺跡では古代の溝などが確認された。大友E遺跡では弥生時代の方形周溝墓、弥生時代終末期から古代の竪穴建物、掘立柱建物、井戸、溝、大量の墨書土器が出土した川跡が確認され、古代の公的施設と見られている。大友F遺跡では古墳時代に管玉の生産が行われていたことが確認された。大友G遺跡では溝を確認、集落の縁辺部と見られている。松根城跡は戦国時代の加越国境付近に立地する山城で、確認調査によって礎石建物跡、盛土、堀、道などが確認され、土師器皿、越前焼、珠洲焼などが出土した。金沢城下町遺跡関係では、同市尾張町1丁目地内の東内惣構跡枯木橋南地点で惣構外側で17世紀末頃から近代にかけて3時期の石垣が確認され、同市玉川町地内の長家上屋敷跡では、正門と長屋門付近の調査によって、整地層や柱穴などが確認された。

野々市市は二日市イシバチ遺跡の調査を行い、弥生時代後期から古墳時代初頭頃の竪穴建物や掘立柱建物などが確認された。

白山市は横江A遺跡、長竹遺跡、幸明おとまる田遺跡、三浦定在光寺遺跡、三浦ゲンショウ遺跡、曾谷遺跡、白山町遺跡、横江荘遺跡と多くの調査を行った。これらのうち白山町遺跡では縄文時代晩期の土器埋設遺構や配石遺構などが確認された。横江荘遺跡では確認調査で弥生時代の方形周溝墓と見られる溝や平安時代の溝が確認され、灰釉陶器や緑釉三足盤片が出土した。幸明おとまる田遺跡では奈良時代の竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑などが確認された。三浦ゲンショウ遺跡では奈良・平安時代の溝、土坑が確認された。曾谷遺跡では平安時代の溝が確認された。三浦定在光寺遺跡では中世の溝、土坑などが確認され、五輪塔などが出土した。

能美市は湯屋古窯跡の瓦陶兼業窯1基を調査し、最終床面から瓦が大量に出土した。

小松市は八日市地方遺跡で弥生時代中期の溝、方形周溝墓、土坑などを確認し、薬師遺跡では古墳時代から平安時代の土坑などを確認、本折城跡では室町時代の区画溝や土坑を確認した。小松城跡では中土居の石垣や堀を確認。石垣は基底部分2段が残り前田利常入場前後の普請と推定されている。また、松谷廃寺跡の確認調査では3基の中世「塚」を確認した。

加賀市は九谷磁器窯跡（史跡）の整備のための確認調査を行い、吉田屋窯前面の建物規模を確定するとともに、「朱田」周辺で江戸時代前期と見られる石垣を検出した。

平成 24 年度 発掘調査遺跡位置図



平成24年度発掘調査遺跡

No	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	主な時代	関係機関	関係事業
1	○	七尾城跡	七尾市古屋敷町	310	中世	国土交通省	一般国道470号能越自動車道(七尾水見道路)
2	○	古府・国分遺跡	七尾市国分町	2,280	奈良～中世	〃	一般国道159号(七尾バイパス)
3	○	千野遺跡	七尾市千野町	3,400	弥生～平安	〃	一般国道470号能越自動車道(七尾水見道路)
4	○	福井ナカミチ遺跡	志賀町福井	1,500	弥生、奈良・平安	石川県土木部	主要地方道志賀田鶴浜線
5		能瀬南B遺跡	津幡町能瀬	2,820	弥生	〃	主要地方道高松津幡線(河北縦断道路)
		加茂窯跡群	〃		古墳		
6	○	大友E遺跡	金沢市近岡町	370	弥生～平安	石川県環境部	石川県水道用水供給
		直江北遺跡	金沢市直江町	480	縄文～中世		
7	○	二ツ寺遺跡	金沢市二ツ寺町	6,000	縄文～近世	石川県土木部	二級河川犀川
8	○	金沢城跡	金沢市広坂2丁目	840	奈良・平安、中世、近世	石川県企画振興部	都心地区整備推進
9	○	小立野ユミノマチ遺跡	金沢市小立野5丁目	43	江戸	石川県教育委員会	県立金沢商業高等学校
10	○	下新庄フルナワシロ遺跡	金沢市四万町、野々市市新庄3丁目	1,110	古墳、奈良・平安	石川県土木部	二級河川高橋川
11		長池カチジリ遺跡	野々市市長池	880	弥生、古墳、中世	〃	二級河川安原川
		長池ニシタンボ遺跡	〃	240	弥生、中世		
		二日市イシバチ遺跡	野々市市西北部土地区画整理事業地	620	弥生、古墳、中世		
12	○	宮保B遺跡	白山市宮保町	380	中世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線
計		12件(本号未掲載4件及びNo10の一部は29号に掲載済み)		21,273			

なな お じょう
七尾城跡

所在地 七尾市古屋敷町地内
調査面積 310㎡

調査期間 平成24年11月30日～平成25年2月6日
調査担当 金山哲哉 矢部史朗 魚水 環



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・惣構の外側約50mの区域に、東西方向に四調査区を設定し、東側の二調査区では地山面上で、西側の二調査区では盛土整地面上で遺構面を確認した。
- ・東側二調査区では、竪穴状遺構や素掘り井戸や大小土坑を検出し、土師器皿や陶磁器のほか、埴塙等の鍛冶関連遺物が出土した。
- ・西側二調査区の内、P6区では、軟弱地盤改良のため、戦国時代に盛土を繰り返し、生活面としていたことが判った。
- ・盛土整地面上の第1面では、多数の土師器皿や、越前焼大甕を出土する土坑、建物礎石ほか小土坑など多数の遺構を検出した。

七尾城跡の発掘調査は、一般国道470号能越自動車道建設（七尾氷見道路）を原因として平成17年度より着手。以降、継続して調査を実施し、本調査で第8次を数える。今回の調査地は、古屋敷大池北側堤体下及び大池内部にかかる4地点であり、橋脚部（P6区・P7区）、及び橋脚設置にともない改修される溜め池排水施設設置箇所（1号底樋区・2号底樋区）に当たる。

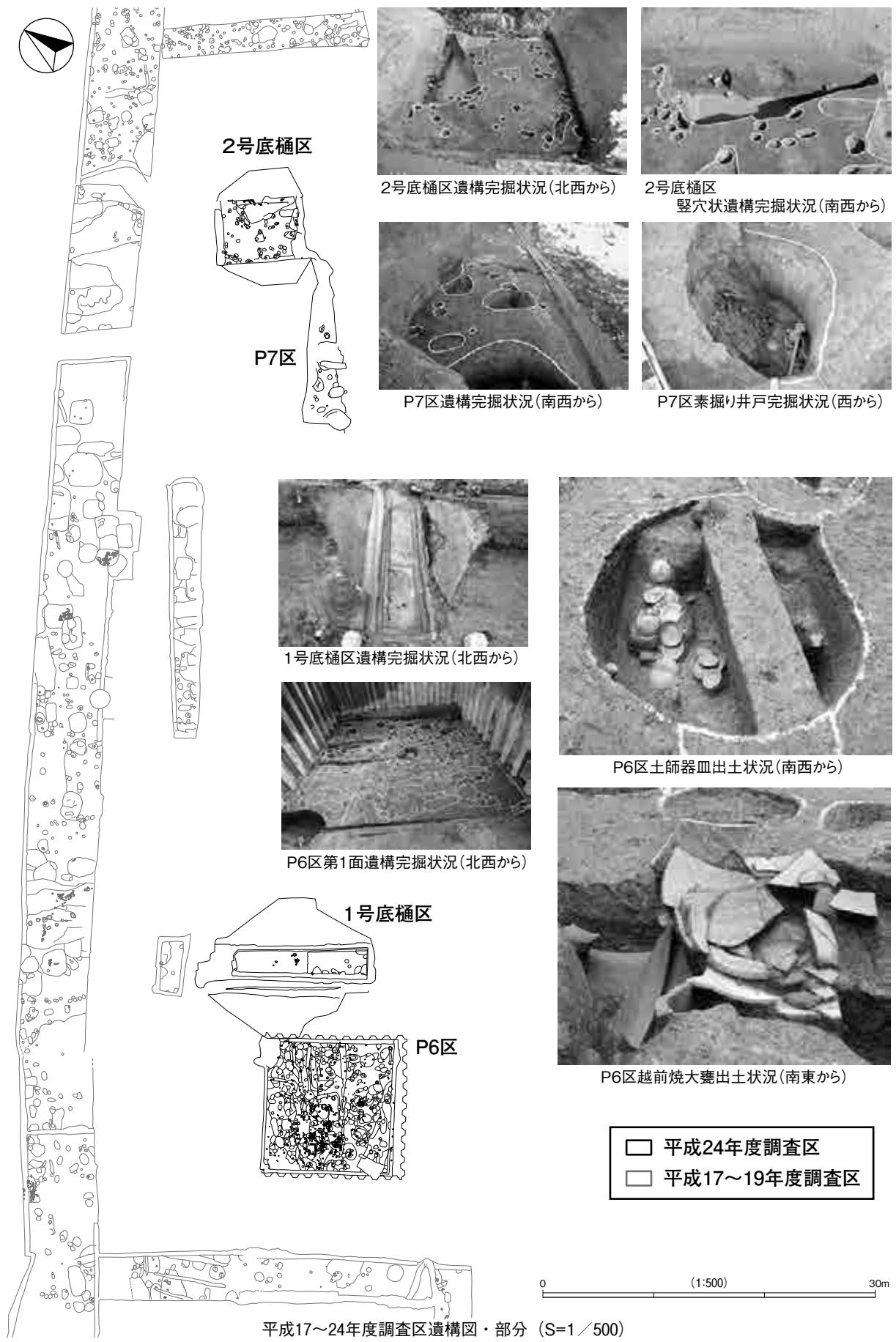
四調査区の内、東側の2号底樋区・P7区は地山面を遺構面とし、過年度の調査区同様に小穴を中心に、竪穴状遺構や素掘り井戸などの遺構を検出、遺物は土師器皿や碗皿類の陶磁器のほか、埴塙等の鍛冶関連遺物が出土した。一方、西側の1号底樋区・P6区は盛土整地層の上面を遺構面としており、1号底樋区では1面、P6区では3面以上の遺構面を確認した。検出状況については、1号底樋区は小穴数基の検出にとどまったが、P6区では、焼土や炭化物を多量に含んだ整地土上の第1面で土師器皿が多数廃棄された土坑や、越前焼の大甕が設置された土坑、規模等は不明であるが点在する建物礎石など、多数の遺構を高い密度で検出した。



調査区位置図 (S=1/5,000)

七尾城跡の発掘調査は、一般国道470号能越自動車道建設（七尾氷見道路）を原因として平成17年度より着手。以降、継続して調査を実施し、本調査で第8次を数える。今回の調査地は、古屋敷大池北側堤体下及び大池内部にかかる4地点であり、橋脚部（P6区・P7区）、及び橋脚設置にともない改修される溜め池排水施設設置箇所（1号底樋区・2号底樋区）に当たる。

今回の調査により、調査地一帯が鍛冶関連等の職人の活動区域であるというこれまでの認識を再確認することとなった。なお、P6区の今年度調査は第1面で終了し、第2面以下については次年度に改めて実施する予定である。次年度調査も併せて、同区域の土地利用の変遷等、戦国期の七尾城下町の様相がさらに明らかになるものと期待される。（金山哲哉）



ふるここくぶ 古府・国分遺跡

所在地 七尾市国分町地内

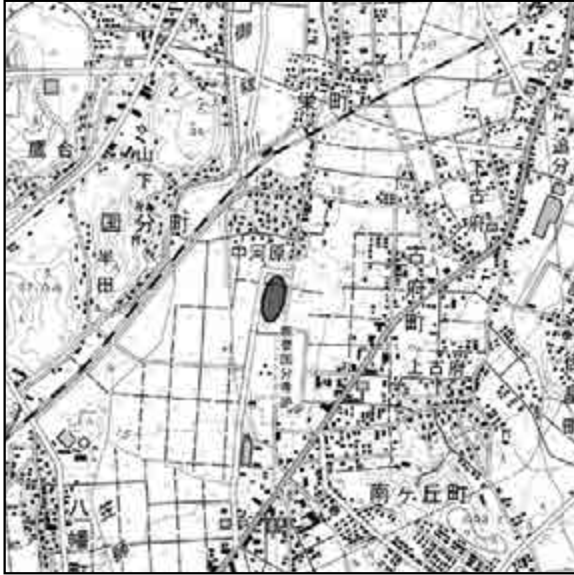
調査期間 平成24年10月1日～平成25年2月6日

調査面積 2,280㎡（発掘完了1,860㎡）

調査担当 安中哲徳 金山哲哉 西田昌弘 山 晶裕

荒川真希子 中泉絵美子 矢部史朗

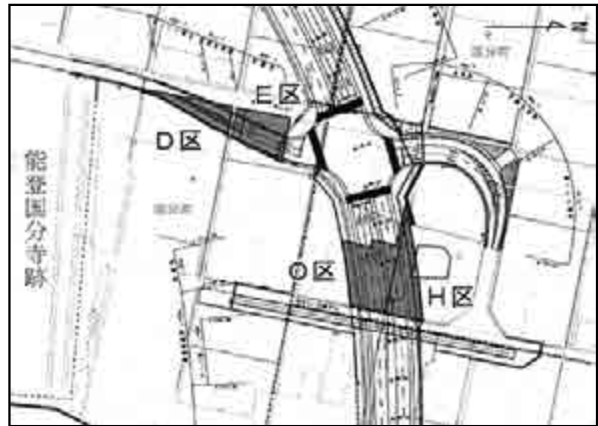
魚水 環 木原伊織



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



年度別調査区割図



平成24年度調査区位置図

調査成果の要点

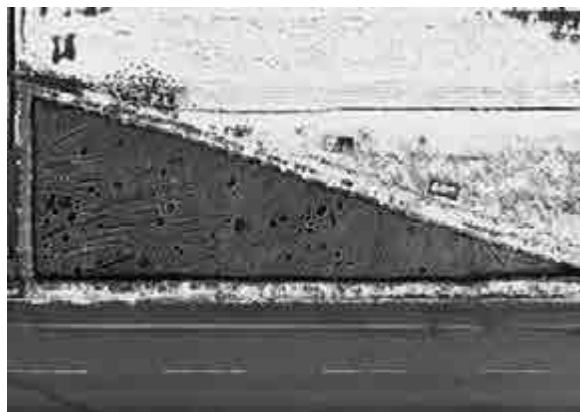
- ・奈良・平安時代から中世の集落や能登国分寺に関連すると考えられる遺構や遺物を確認した。
- ・奈良・平安時代では、周辺の調査地と同様、掘立柱建物や井戸、方形の土坑、畝溝などの遺構を多く確認し、土師器や須恵器、瓦、木製品などの遺物が多く出土した。
- ・中世では、掘立柱建物や井戸、土坑、溝などのほか、堀跡と考えられる溝や道路側溝と考えられる溝を検出しており、土師器や珠洲焼などの陶磁器、石製品、銅銭などの遺物が出土した。
- ・能登国分寺と同時期の遺物や国分寺創建以前の遺物も多く出土しており、国分寺創建前後の動向を考える上で注目される。

七尾市の国史跡能登国分寺跡北側に広がる古府・国分遺跡では、平成17年度以降の一般国道159号(七尾バイパス)建設に伴う発掘調査により、奈良・平安時代から中世(鎌倉・室町時代)の集落跡や能登国分寺に関連すると考えられる遺構や遺物が確認されている。平成24年度調査の結果、D区では能登国分寺と同時期の平安時代中頃の掘立柱建物や平安時代末から中世前半の畝溝、掘立柱建物、E区では奈良時代中頃から平安時代にかけての大型掘立柱建物や井戸、土坑、畝溝を検出した。H区では平安時代末から中世前半にかけての大型掘立柱建物や堀跡と考えられる溝、井戸、道路側溝、O区では奈良時代後半から平安時代中頃の掘立柱建物や井戸、土坑などを検出した。

奈良・平安時代の掘立柱建物群や井戸、土坑などからは、能登国分寺創建以前の8世紀中頃から後半頃や能登国分寺と同時期の9世紀中頃の土師器や須恵器、木製品が多く出土しており、瓦や瓦塔、墨書土器の出土は少ないが、風字硯や円面硯など古代の役所で使用される硯も出土した。また、公的な性格を有し、計画的に配置されたと考えられる建物群や井戸などの遺構は、古代における能登国分寺の成立から再建、終焉までと同一の変遷をたどっており、能登国分寺とその前身である古代寺院（大興寺）を考える上で、今回の調査成果も注目される。国分寺再建期の平安時代代末から中世前半にかけては、倉庫や井戸、道路側溝などから土師器や珠洲焼などの陶磁器、石製品、木製品、銅銭などが出土した。また、畝溝群が確認されたことから、建物域から耕作域へと変化した場所も見られる。能登国分寺の衰退に伴い、建物群の公的な性格は失われていったと考えられるが、中世後半以降の能登国分寺周辺の様相については詳しくわかっていない状況である。（安中哲徳）



古府・国分遺跡と能登国分寺跡（北から）



D区完掘状況（西から）



H区完掘状況（南から）



D区掘立柱建物・畝溝検出状況（北から）



H区井戸枠検出状況（南から）



O区完掘状況（西から）

ちの 千野遺跡

所在地 七尾市千野町地内

調査期間 平成24年4月25日～同年11月15日

調査面積 3,400㎡

調査担当 西田昌弘 魚水 環 矢部史朗 木原伊織

中泉絵美子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代の平面円形を呈する竪穴建物3棟と方形周溝墓を1基を検出した。方形周溝墓では墳丘部において埋葬施設を3基確認しており、周溝から弥生時代中期後半の土器が出土した。
- ・ 古墳時代前期から中期の平面方形を呈する竪穴建物を多数確認した。
- ・ 奈良・平安時代の掘立柱建物などを確認しており、特に平安時代前期の建物や土坑は、能登国分寺が整備された時期と重なっており、関連性がうかがえる。

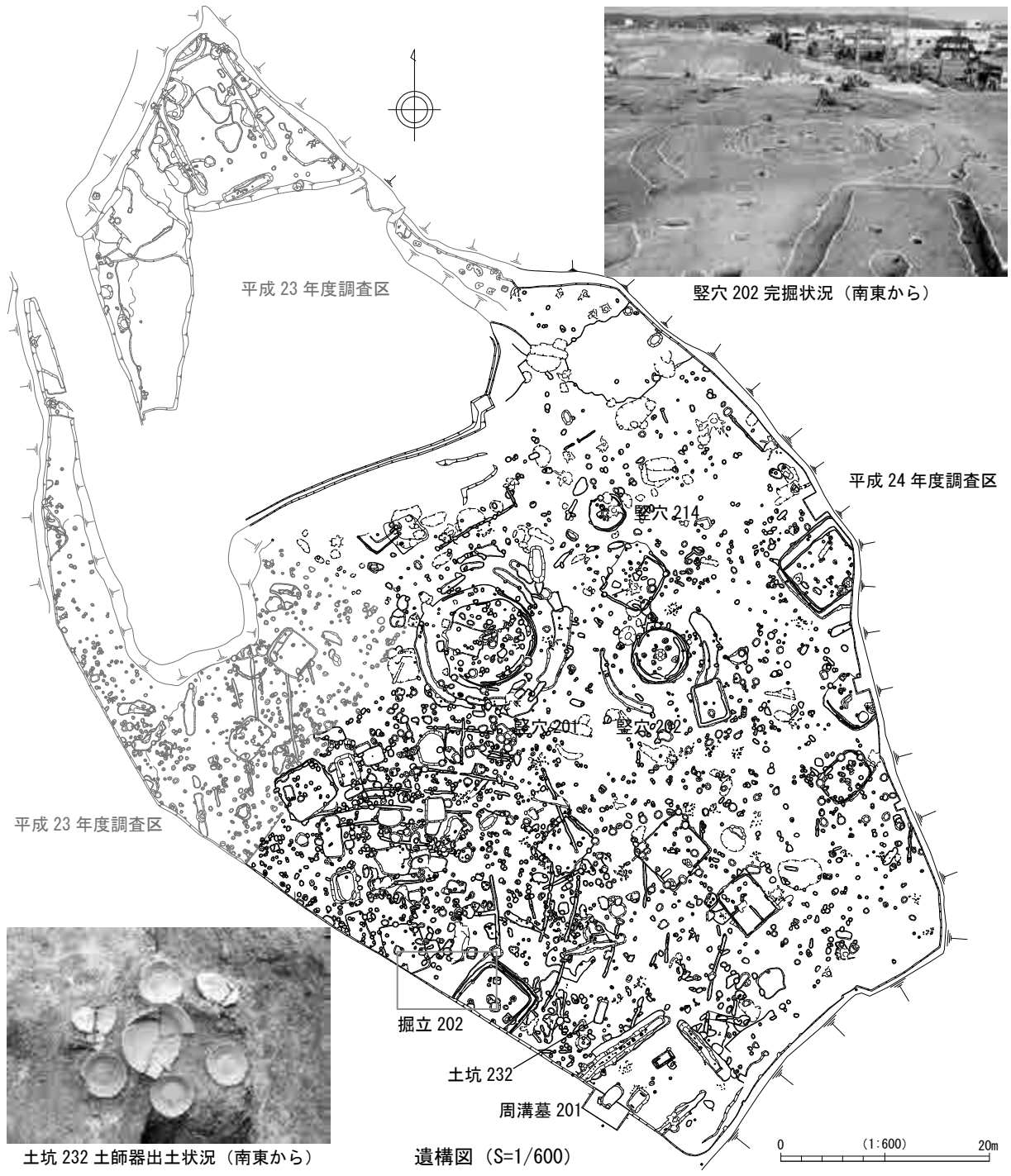
千野遺跡は、七尾城山から西へのびる低丘陵の先端部に位置し、標高28m前後を測る。

調査原因は、国土交通省による一般国道470号能越自動車道建設（七尾水見道路）であり、平成23年度に続き第2次調査となる。今回の調査では、弥生時代の集落および墓、古墳時代から平安時代の集落を確認した。

弥生時代では、中期後半の竪穴建物や方形周溝墓、土坑などが確認できた。竪穴建物は、丘陵中央部で3棟検出しており、径5.7～9mの竪穴部をもつ2棟の竪穴建物（竪穴201・202）では、周溝も確認している。また、小型の竪穴214からは、緑色凝灰岩製の管玉未成品が多数出土したほか、石針などの製作道具もみられ、製作工房であったと考えられる。一方、方形周溝墓は低地を望む丘陵の先端部で検出された。平面形は長方形を呈し、周溝は隅で切れる。規模は周溝の内側で短軸約7.5mを測り、長軸は南西側の溝が民地にかかるため全長は不明ながら、現地踏査状況から、10m程と想定している。また、周溝内における土器の出土状況は平成23年度と類似しており、墳丘部において土器の供献がなされたものと考えられる。墳丘部では、埋葬施設を3基確認した。土層観察などから木板痕跡が確認でき、長方形を呈する木棺部は1.3～1.4m×0.6～0.9mを測る。いずれも、棺内での副葬品等は見られなかった。

古墳時代では、前期～中期を中心とする竪穴建物を10棟以上確認している。平面形は方形へと変化し、一辺4～7mを測る。特に、大型の建物では1～2回程度の建て替えが確認できた。

奈良・平安時代では、掘立柱建物や土坑のほか、平安時代末頃の木棺墓（土坑232）などを確認している。掘立柱建物の柱穴は深く掘り込まれ、柱痕跡を残すものが多く見受けられた。土器の出土が稀なため個々の時期は不明瞭ながら、軸方向などから3時期に大別できるものと考えている。なかでも、真北に軸をもつ2×4間の東西棟の掘立柱建物（掘立202）は、一辺1m程の方形の柱穴からなり、他の建物とは異なる様相を呈する。掘立柱建物や土坑群の中には、本遺跡の北500mに位置する能登国分寺が整備された時期とかさなるものもみられ、その関連が注目される。（西田昌弘）



竪穴 202 完掘状況 (南東から)



土坑 232 土師器出土状況 (南東から)



掘立 202 完掘状況 (東から)



周溝墓 201 埋葬施設調査風景 (南から)

ふくい 福井ナカミチ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町福井地内

調査期間 平成24年9月6日～同年12月11日

調査面積 1,500㎡

調査担当 端 猛 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・奈良・平安時代の集落跡を調査。掘立柱建物を1棟確認した。
- ・溝から9世紀の土器が大量に出土し、墨書や人物画が描かれた須恵器も含まれる。

福井ナカミチ遺跡は、旧福野潟の南側、眉丈山系から連なる低丘陵の裾に位置する。主要地方道志賀田鶴浜線の道路改良事業に伴い、平成23年度に続き調査を実施した。周辺には旧福野潟を取り囲むように縄文から近世まで多くの遺跡が存在する。

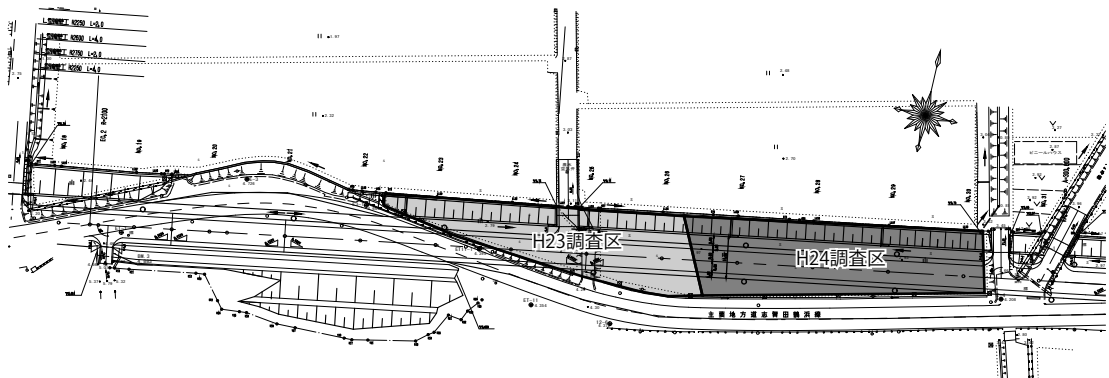
調査では、弥生時代及び奈良・平安時代の集落跡を確認した。調査区東半で弥生時代の土坑と溝を検出した。建物は確認できていないが、該期の人々の営みを裏付ける一定量の弥生土器（弥生時代後期）が出土した。

調査区のほぼ全域で平安時代の土器が出土した。特に、調査区西側で検出した溝（SX311・313）から9世紀の土師器、須恵器が大量に出土し、須恵器の中には20点以上の墨書土器や人の顔が描かれた坏が含まれる。平成23年度に出土した銅製の帯金具はこの溝の上層からの出土である。

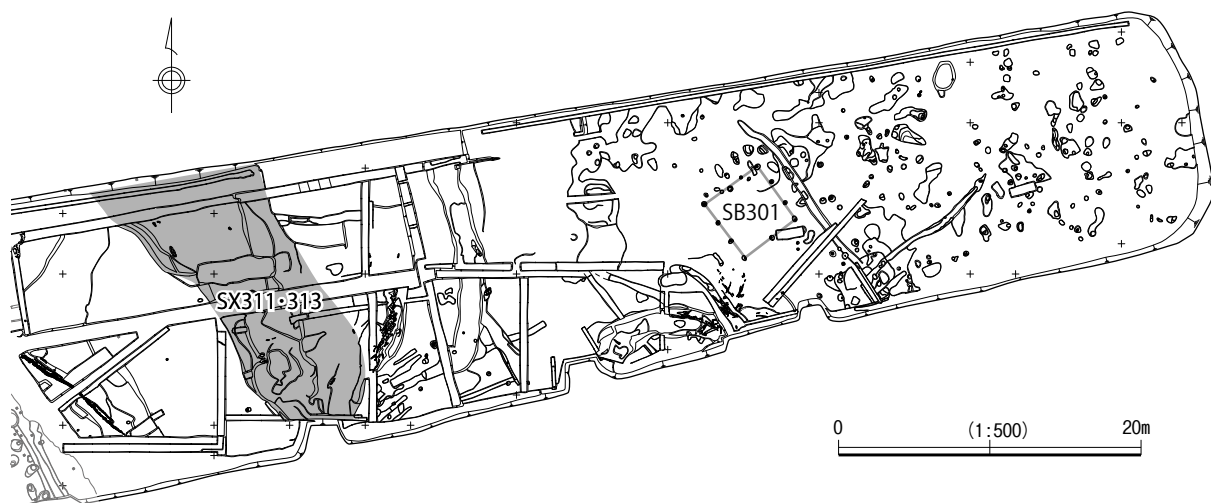
掘立柱建物を1棟検出した（SB301）。2間×3間の側柱建物でほとんどの柱穴で柱根が遺存していた。柱穴から遺物の出土はなかったが、この建物と並行し覆土がほぼ同じ溝から8世紀の須恵器が出土しており、平成23年度に確認した9世紀代の掘立柱建物群に先行する可能性がある。

なお、前述の溝（SX311・313）から九州型石錘が出土している。大型の製品で一般的な滑石製ではなく凝灰岩製である。九州型石錘は弥生時代中期から古墳時代後期にかけて北部九州の玄界灘沿岸に存在するという。溝の時期とは違うものの、地元には北部九州の宗像族との繋がりを示す伝承もあり興味深い出土遺物である。

(端 猛)



調査区位置図 (S=1/2,000)



遺構配置図 (S=1/500)



調査の様子 (東から)



調査区遠景 (北から)



墨書土器



掘立柱建物 (SB301) (上が北西)



人面墨書土器



九州型石錘

なお え きた おお とも
直江北遺跡、大友E遺跡

所在地 直江北：金沢市直江町地内 調査期間 直江北：平成24年11月27日～同年12月27日
大友E：金沢市近岡町地内 大友E：平成24年8月23日～同年9月24日
調査面積 直江北：480㎡ 調査担当 熊谷葉月 木原伊織
大友E：370㎡



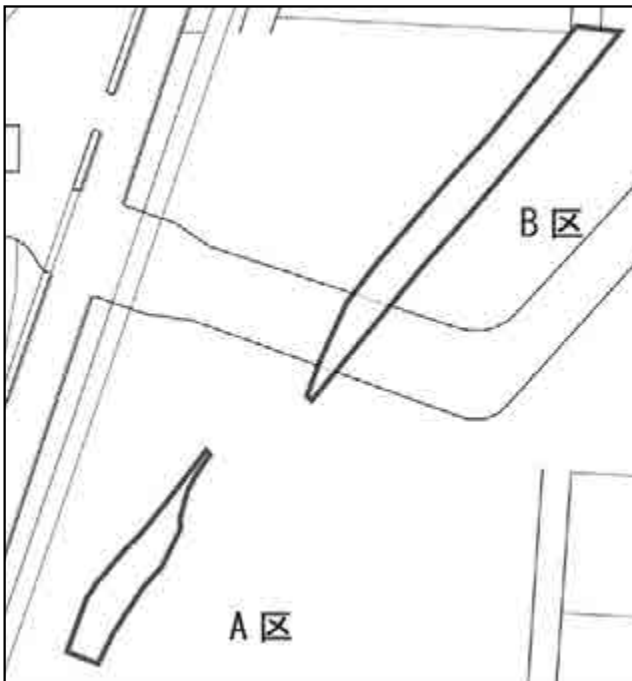
遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

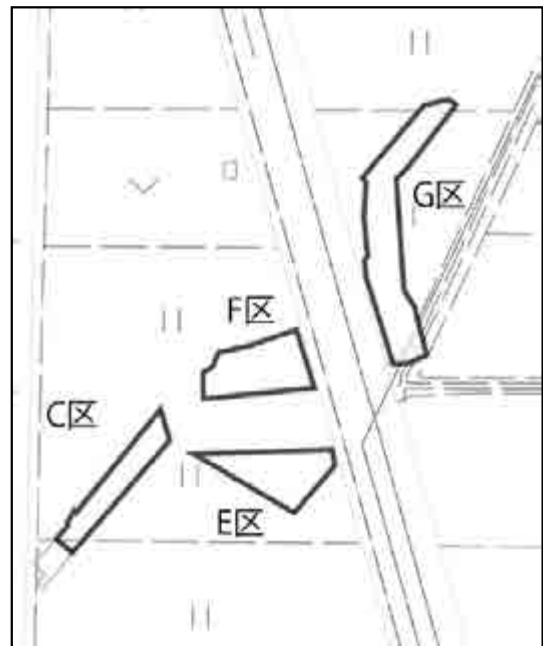
- ・直江北遺跡 弥生～古墳時代の溝、柱穴を検出。
- ・大友E遺跡 弥生～古代の川跡から、梯子などの木製品、土器が出土。古代の井戸、柱穴などを検出。

大友E遺跡、直江北遺跡は金沢港に近い沖積地に立地する。

調査は石川県水道用水供給事業を原因としている。



直江北遺跡 調査区位置図 (S=1/2,000)



大友E遺跡 調査区位置図 (S=1/2,000)

直江北遺跡 A区は攪乱が著しく、小穴や浅く細い溝がいくつか検出されたが、性格のわかる遺構はみとめられなかった。B区では、弥生時代後期～古墳時代後期の土器が出土する溝を30m検出した。そのほか直径80cm円形プランで深さ60cmの穴1基が検出されている。古代の柱穴の可能性が考えられる。また、溝の基盤層となる砂質の包含層から縄文時代晩期の土器も出土したが、これらを伴う明確な遺構は検出されなかった。



A区



B区

大友E遺跡 昨年度に引き続いての調査で、C・E・F・Gの四つの調査区を設定した。同年度、隣接地を金沢市埋蔵文化財センターが調査を実施している。鞍月用水西側の調査区（C・E区）では同一流路川跡を検出した。上層では古代の土器も含まれるが、古墳時代と弥生時代の土器が多く出土した。木製品は、下駄、梯子などが出土した。C区では、川跡のほか、土坑2基を検出した。F区では、鞍月用水東側調査区（G区）では、古代の井戸2基、柱穴、土坑を検出した。井戸は枠が残っており、縦板組隅柱横棧どめ（SE01）、曲物の3段重ね（SE02）であった。（熊谷葉月）



G区 SE01



G区SE02



E区 川跡



E区 川跡 出土梯子

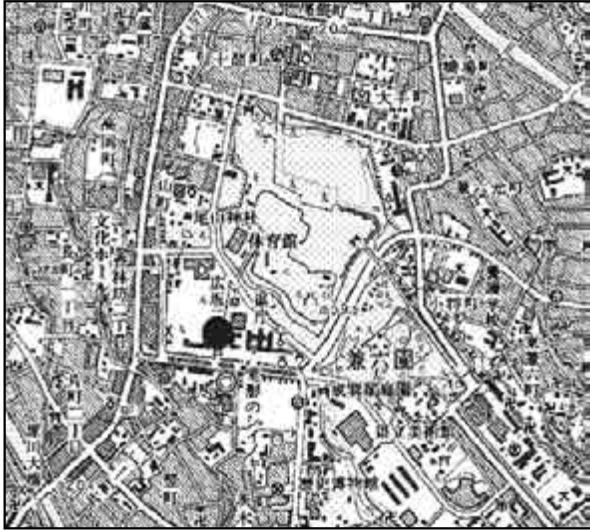
かなざわじょう
金沢城跡

所在地 金沢市広坂2丁目地内

調査期間 平成24年9月27日～同年12月9日

調査面積 840㎡

調査担当 熊谷葉月 木原伊織



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・近世の石列と方形石組を確認した。石列西側に瓦が堆積しており、建物基礎であった可能性がある。
- ・中世末～近世初めの区画溝、土坑を確認した。区画溝からは木製品、土器、陶磁器などが出土している。
- ・古代の柱穴、溝を確認した。

調査は、石川県都心地区整備推進事業に係るもので、平成19・20年度の調査区（現：石川県しいのき迎賓館）の西北に当たる。一帯は、金



調査区配置図 (S=1/5,000)

沢城の外郭の一部で「堂形」と呼ばれていた地点である。明治6年から、平成14年まで石川県庁が置かれ、それに伴う建物や地下埋設物が多く、深く広範囲に攪乱を受けていた。

第1面（幕末～近代）明治期の県庁関連建物の基礎と思われる石列、暗渠の土

管列などを検出した。

第2面（江戸前期～後期）石列、方形石組等を検出した。石列は戸室石10石、5mが検出され、南北方向にさらに続いていたものと思われる。石列前面となる東側に大量の瓦が堆積しており、建物基礎であった可能性もある。方形石組は、内法で長辺0.8m×短辺0.7m、深さ1.0mで、20～30cm程度の川原石や戸室石の割石が使用されていた。底付近に木の葉などの腐植層があり、水溜めの可能性がある。

第3面（中世末～江戸初期）では、溝、土坑等を検出した。溝は幅約3m、深さ約1mで南北方向に約18m検出された。平成20年度調査区の区画溝SD23につながる。陶磁器、土師器皿、瓦、木製品が出土している。木製品は漆器椀や箸、曲物底板などがあつた。土坑は、約3m×約2m深さ約1mの方形竪穴状のほか、直径約3mの円形で深さ1.5mの大型のものなどが検出された。

第4面（古代）では、柱穴、溝（SD02）、土坑などを検出した。柱穴は直径70～80cm程度のほぼ円形、南北方向を軸として4基並ぶものもあるが、建物としての規模は不明である。SD02は、幅約3m深さ0.5mを検出した。出土した土器はあまり多くないが、7世紀～9世紀と時期幅は広い。

（熊谷葉月）



調査区全景



第2面 石組み遺構



第2面 石列



第3面 区画溝(SD01)



第3面 SD01遺物出土状況



第4面 柱穴列

しもしんじょう
下新庄フルナワシロ遺跡

所在地 野々市市新庄3丁目地内

調査期間 平成24年9月3日～同年10月18日

調査面積 750㎡

調査担当 和田龍介 中泉絵美子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・古墳時代後期、奈良・平安時代の集落遺跡である。
- ・2区で古墳時代後期の須恵器を出土する竪穴建物を検出した。
- ・2区北部～3区は遺構分布が散漫である。

本報告は、本誌29号報告分（1区・右岸調査区）に続き実施された左岸調査区750㎡（2区・3区）の概要と全体のあらましを述べる。

【2区】

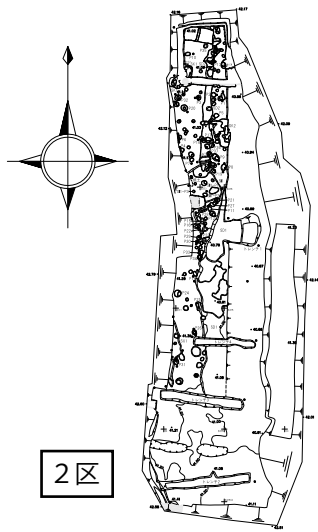
竪穴建物・溝・土坑・小穴・旧河道を確認し

た。調査区東側で検出された旧河道は高橋川の旧流路により攪乱され川岸の一部のみが遺存する状況であったが、土師器・須恵器・緑灰釉陶器片が出土した。細片のため詳細な時期は不明であるが、右岸1区の遺構群と時期を同じくするものと思われる、1区南部で確認された川跡と同一流路の可能性がある。調査区南部で検出された竪穴建物は西半分が調査区外に延びており、南北辺約3.1m、略方形を呈すると想定される。竈や壁溝等の施設は確認できず、また柱穴も不揃いで組み合わせの確定に至っていない。床面付近に7世紀後半～末に比定できる須恵器坏が出土しており、竪穴の時期を知り得る数少ない資料である。略円～略楕円形を呈し、柱痕跡が認められる小穴が調査区北側にまとまっているが、調査区が狭小なこともあり掘立柱建物の復元にまで至っていない。

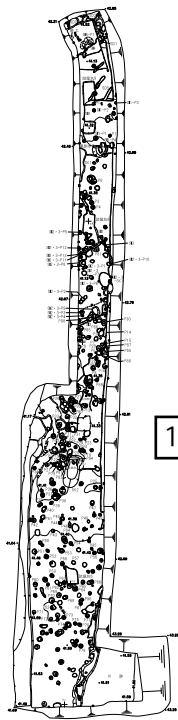
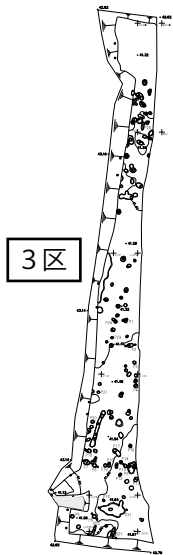
【3区】

浅く不整形な小穴が散在しており、1・2区に比して遺構・遺物ともに希薄な様相を見せている。

本遺跡の西側には、野々市市教育委員会が調査を実施し、大きな成果を上げた奈良・平安時代の大規模集落である上林・新庄遺跡群が広がる。1区の竪穴建物の様相はおおむね上林・新庄遺跡群に類似しており、本遺跡も同遺跡群に含まれる可能性を示唆している。一方で遺跡群により近い2区・3区では遺跡群よりも後出的な様相や、2区の竪穴建物のように先行する集落の存在を想定することができるなど、1区とは異なった様相がうかがえる。遺跡全体としては、先行的な集落の存在を予想できるものの、上林・新庄遺跡群の一角を担いながらやや新しい時期まで活動していたものと考えられ、平安時代の手取川扇状地開発の様子をかいま見ることができる。 (和田龍介)



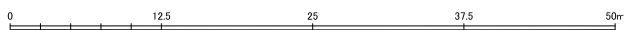
調査区遠景（北から）



2区 竪穴建物



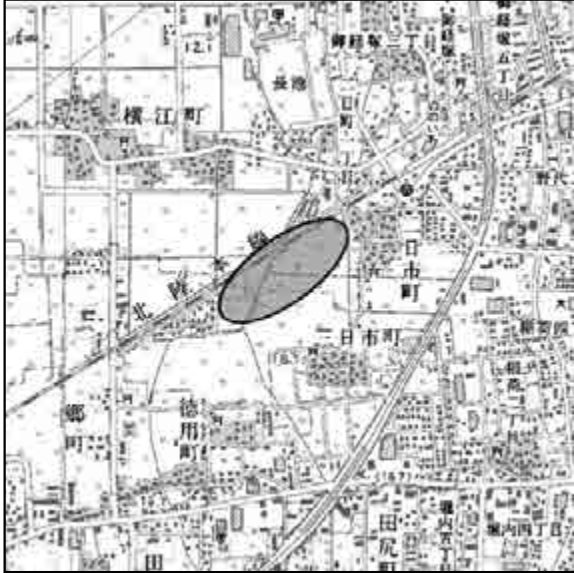
2区全景（北から）



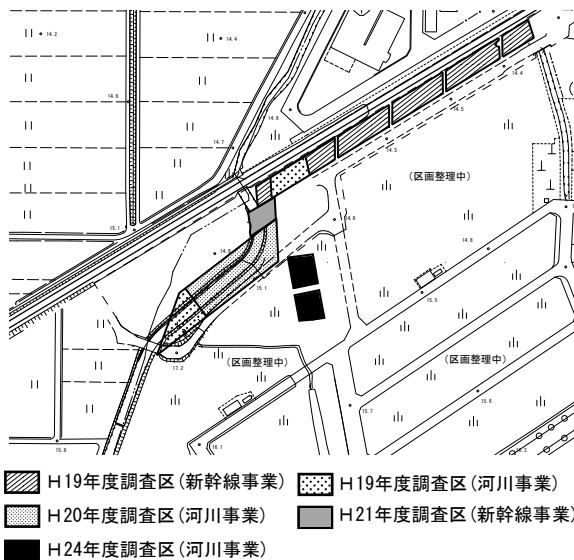
平面図 (S = 1 / 600)

ふつ か いち 二日市イシバチ遺跡

所在地 野々市市北西部土地区画整理 調査期間 平成24年11月1日～同年24年12月14日
事業地内 調査担当 北川晴夫 山 晶裕 中泉絵美子
調査面積 620㎡



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/5,000)

調査成果の要点

- ・弥生時代終末期～古墳時代初頭と中世の集落を確認した。
- ・弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟などを検出した。
- ・中世の掘立柱建物2棟、溝8条などを検出した。

二日市イシバチ遺跡は野々市市北西部に位置し、当センターにおいて平成19～21年度に発掘調査を実施している。過年度調査は北陸新幹線建設と安原川広域河川改修の2事業に伴って実施されており、平成24年度調査は後者の事業によるものである。

調査では竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑などを検出した。量的には多くはないが弥生土器を主体とした遺物が土器し、弥生時代終末～古墳時代初頭と中世の集落を確認した。

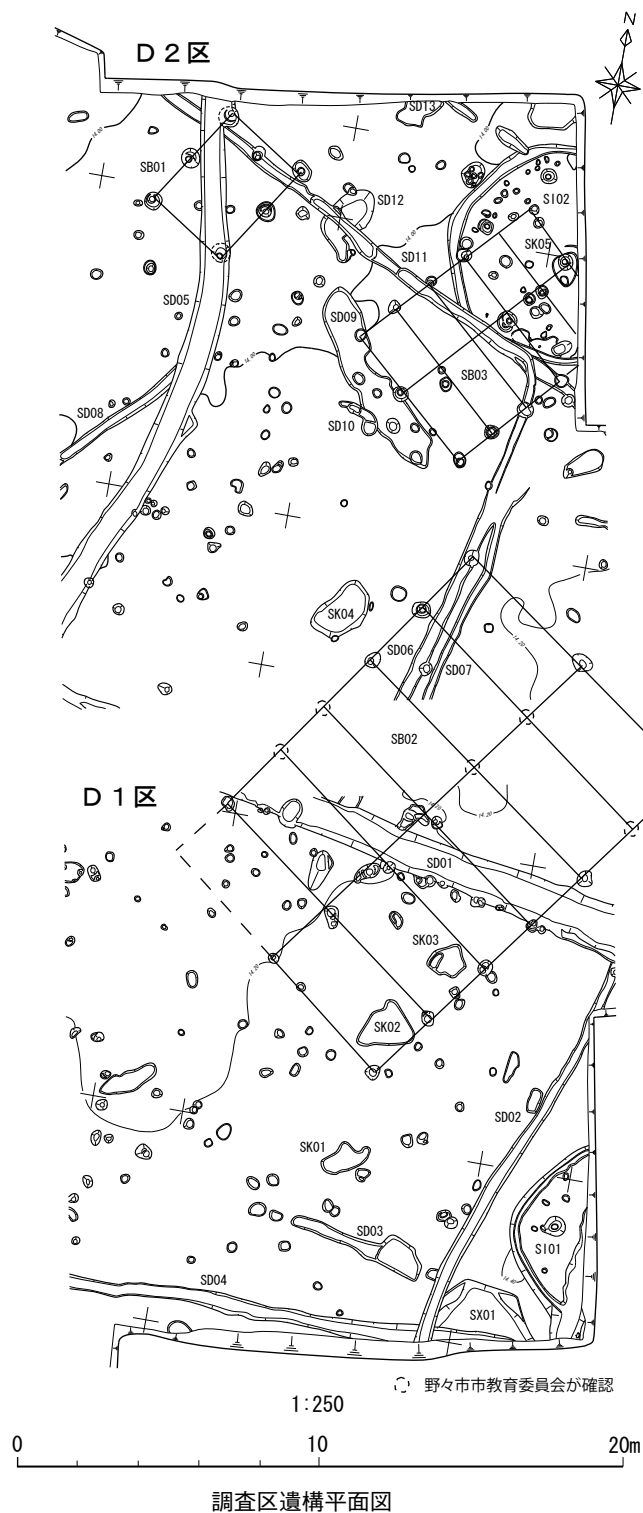
弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構には竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟などがあり、竪穴建物は2棟とも調査区東端部で建物の一部を検出した。SI01は平面形が隅丸方形に復元されると考えられ、建物西側で柱穴1基を検出した。遺構検出面から約20cm下で確認した床は、地山の黄褐色シルトと約10cm以下の石を混ぜた厚さ7～8cmの硬化面となっていた。SI02は、平面形が多角形に復元されると想定され、柱穴3基を検出し、遺構検出面から床面までの深さは約10cm以下と浅く、貼床は認められなかった。周囲には土坑状や溝状を呈

する遺構が巡り、この遺構は建物の外周溝と考えられる。掘立柱建物は規模が1間×2間で、柱穴の底面は硬化面となり、柱の重みだけでなく、建物を建てる前に堅固にしていたと考えられる。

中世の遺構には掘立柱建物2棟、溝8条などがある。掘立柱建物は2棟とも総柱建物で、規模が2間×5間と2間×5間以上とみられる。建物の長軸方向がともに北東～南西方向で、覆土が同じであることから、同時期のものと考えられる。溝は概ね南北方向のもの3条と東西方向のもの5条を検出し、切り合い関係が確認された。また調査区中央を走る東西方向の溝は幅が約1.5mと一番広く、集

落形成の上で重要な位置を占める区画溝であったと考えられる。

過年度調査において、弥生時代の住居は間隔を持った配置をとっていることが指摘されており、今回の調査で確認した弥生時代終末期～古墳時代初頭の建物3棟は散見され、それを追認するものであった。一方、中世の遺構において掘立柱建物と溝、溝と溝の交錯が確認されたことから、中世の集落は複数の時期が存在していた可能性がある。(北川晴夫)



調査区遠景 (西から)



D 2 区遺構検出状況 (南から)



D 1 区S101完掘状況 (西から)

みやほ 宮保B遺跡

所在地 白山市宮保町地内

調査期間 平成24年7月30日～同年10月3日

調査面積 380㎡

調査担当 山 晶裕 林 大智



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・12～15世紀を中心とする集落跡。
- ・竪穴状遺構、掘立柱建物、小穴などを検出し、土師器、陶磁器のほか、砥石などの石製品、箸などの木製品が出土した。

宮保B遺跡はJR松任駅から南西に約3kmの標高16m前後の手取川扇状地扇端部に立地する。

北陸新幹線白山総合車両基地（仮称）の建設に伴い、平成21・22年度に発掘調査を実施しており、平成24年度調査も同じく車両基地の路盤工事等に起因する。

調査区東寄りにおいて、幅約2mの堀を確認したが、これより西側に竪穴状遺構や掘立柱建物が濃密に分布する傾向が窺われる。堀は北側の平成21年度調査区及び南側の同22年度調査区において延長部分が検出されており、堀に区画された屋敷地の広がりをより明らかにすることができた。

出土遺物には土師器、陶磁器などの土器類のほか、砥石などの石製品、箸などの木製品がある。土器類の年代から屋敷地は、12世紀～15世紀に営まれたものと考えられる。（松山和彦）



遺跡遠景（北から）



調査風景（西から）



密集する竪穴状遺構

平成24年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は、金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市、平成21～23年度調査）の実測、トレース、遺構図トレースを実施した。多数の陶磁器、土師質土器、珠洲焼き、ガラス製の皿、ビン類、瓦、誰もが近寄りたいたい便ツボなどの実測、トレースを行った。

七尾城跡（七尾市、平成22年度調査）の記名・分類・接合、実測、トレース、遺構図トレースを実施した。陶器、土師質土器、染め付け、硯、石臼、石鉢など石製品の記名・分類・接合の後実測、トレース作業を行った。石鉢は、肩幅ぐらいの大きさでノミ痕が丁寧に付けられて、けっこう重く、実測の反転などに手こずった。

大泊A遺跡（七尾市、平成21年度調査）の記名・分類・接合、実測、トレース、遺構図トレースを実施した。縄文土器、須恵器、製塩土器、「新」の墨書土器、金属では、鉄斧、石器では、磨製石斧、打製石斧、石鎌など出土記名・分類・接合の後実測、トレースの作業を行った。鉄斧は薄く繊細に作られている。

小立野ユミノマチ遺跡（金沢市、平成23年度調査）上半期の残りの遺構図トレースを行った。（松田智恵子）

県関係調査グループ

下半期の出土品洗浄は、平成21年度に調査した長池ニシタンボ遺跡出土品以外は、平成24年度に調査した七尾城跡、千野遺跡、古府・国分遺跡など合計11遺跡について作業を行った。（土屋 宣雄）



石製品接合（七尾城跡）



石製品実測（七尾城跡）



鉄斧実測（大泊A遺跡）

下半期は、金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市・平成21～23年度調査）、加茂遺跡ほか1遺跡（河北郡津幡町・平成23年度調査）、畝田・寺中遺跡ほか2遺跡（金沢市・平成19年度調査）、畝田B遺跡（金沢市・平成19年度、20年度調査）の整理作業を行った。

金沢城下町遺跡は上半期に引き続き、石製品の実測・トレースを行った。

加茂遺跡は須恵器を中心に、土師器、木器などを実測・トレースをし、遺構図トレースを行った。窯跡ということもあり、状態がかなり悪い須恵器が多く、ゆがみがひどいため、直径や傾きを決めるのに苦勞した。

畝田・寺中遺跡は、木製品のみの実測・トレースであった。木槌・木錘・弓、井戸枳部材が数多くあった。曲物を2、3段積み上げたものなどもあり、その大きさから、ほとんど作業台の上に乗っての実測となり、手間と時間のかかるものであった。

畝田B遺跡は、椀などの土師器、杯などの須恵器、墨書土器、石鏃、敲石、打製石斧などの石製品、管玉の未製品、井戸枳部材を中心とした木製品などを実測・トレースし、最後に遺構図トレースを行い、下半期の作業を終えた。

（北野 清美）

特定事業グループ

下半期は、金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市、平成21～23年度調査）、水白モンショ遺跡・小竹ボウダ遺跡・小竹スナダ遺跡（鹿島郡中能登町、平成23年度調査）、知気寺八反田遺跡（白山市、平成23年度調査）、金沢城跡（金沢市、石川門 平成22・23年度、橋爪門 平成23年度、玉泉院丸 平成23・24年度調査）



土器接合（畝田B遺跡）



井戸枳実測（畝田寺中遺跡）



遺構図トレース（畝田B遺跡）

の整理を行った。

金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)は、上半期の接合から引き続き実測・トレースを行った。城下町の屋敷跡とみられるだけに、遺物は土師器皿やすり鉢・碗・皿・鉢・甕・壺などの陶磁器類、火鉢・焜炉・人形などの土製品、瓦、細工を施した金属製品、銭、木製品と多種多様であった。なかでも便所甕の実測は衛生的な問題もあり、手袋・マスク着用するなど目だけ出しているような完全防備な服装で取り組んだ。

水白モンシヨ遺跡、小竹ボウダ遺跡、小竹スナダ遺跡は、弥生土器、土師器・須恵器などの土器の記名・分類・接合と実測・トレース、井戸枠・柱根・礎板などの大型木製品の実測・トレースを行った。

知気寺八反田遺跡は土師器、須恵器の実測・トレースを行った。

金沢城跡は、碗・皿などの陶磁器類、金属製品の実測・トレース、大型石製品・瓦の記名・分類・接合と実測・トレースを行った。大型石製品は、もはや毎年度恒例となった感がある。重いことが一番の困難であり、方眼紙の上に持ち上げたり移動させるのは二人がかりである。重いことに加え複数実測だったためかなりの日数を要した。(西川 朗聖)



大型石製品実測(金沢城跡)



大型甕実測(金沢城下町遺跡(丸の内7番地内))



遺物トレース(金沢城下町遺跡(丸の内7番地内))

西日本への浮線文土器と舟形土器・容器の波及

久田 正弘

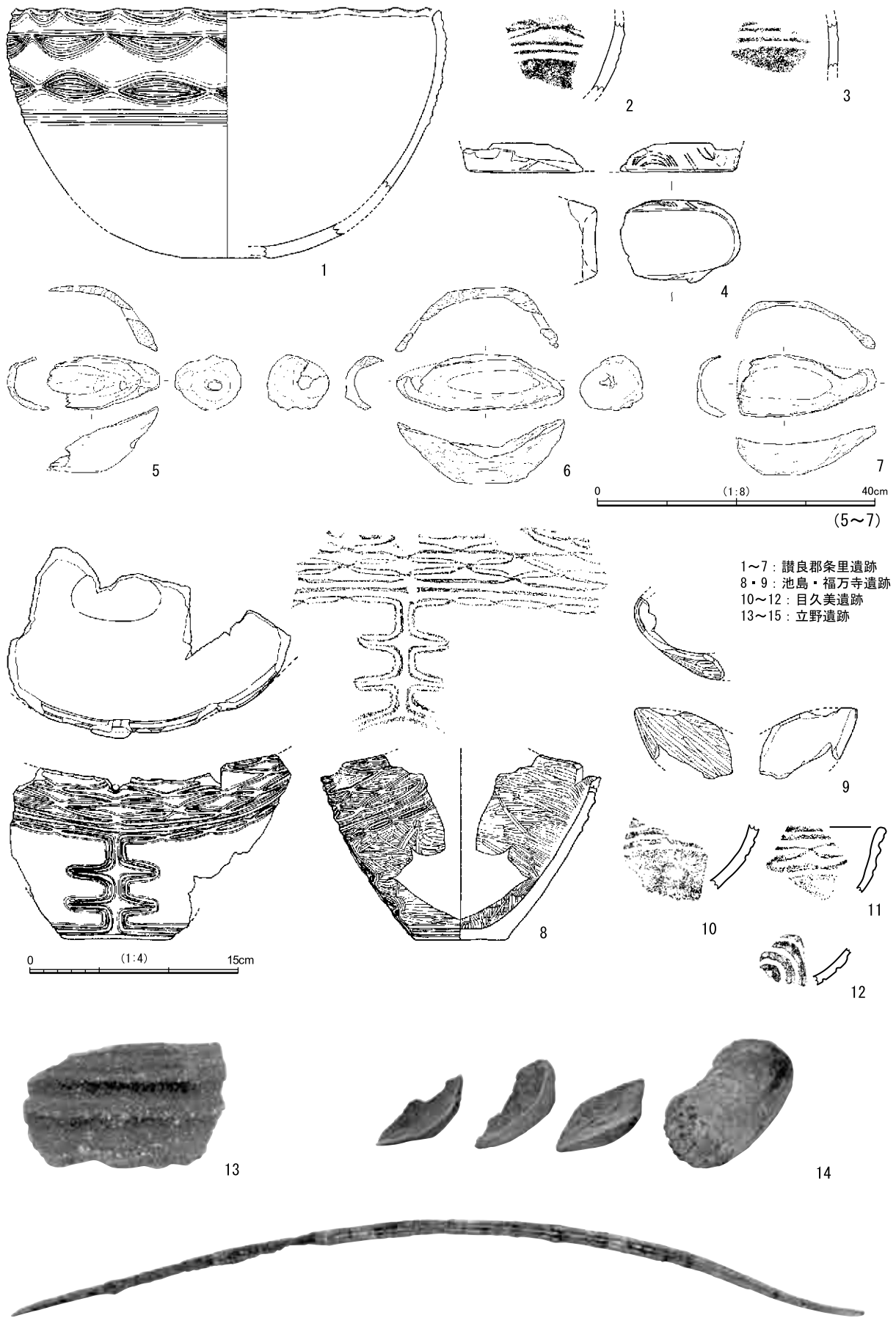
1. はじめに

近年、西日本において東日本系の土器・漆器などの出土が報告され、また西日本系の土器などが東日本でも出土することも紹介されるなど、縄文晩期終末～弥生前期の交流が一方通行的で無いことが明らかに成りつつある。このことは、すでに石川1985・1995、小林青樹1999、設楽・小林2007などによって紹介・考察されているものであり、目新しいものではないが、筆者が気になった事例の中から、土器の胎土写真（第2図）を参考にして紹介したい。第2図の写真は、ペンタックスWG-IIの顕微鏡モード（1cm接写）で撮影した画像を4.5%に縮小したものである。

2. 西日本の浮線文土器と舟形土器・容器

第1図1～7は大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡（中尾ほか2009）出土である。1～3は浮線文土器であり、2・3は色調が異なるが同一個体の可能性が指摘される。1は他と大きく異なる鉱物・岩石組成（報告書F類）であり、斜長石が突出し、石英・角閃石が多く、流紋岩・デイサイトが少量認められるという。砂粒（第2図写真1）は、1mm大の白色粒子が主体であり、石英（クリスタル）が目立ち角閃石が少し入る。文様帯構成から、氷I式古段階に併行すると思われる。2・3は同一個体の可能性があり、3は浮線文が体部の区画浮線文と繋がる可能性があるだろうか。2の砂粒（写真2）は白色粒子が主体であり、石英（クリスタル）も入る。3の砂粒（写真3）は、1mm大の白色粒子が主体であり、石英（クリスタル）がやや目立つ。筆者の石英（クリスタル）は、透明ガラスを割ったようなものを言っており、火山ガラスを誤認している可能性もあるので、用語は厳密な意味ではなく感覚で使用していることを断わっておく。4は鉢形土器の底部と思われ、小判形であるので類例が無い奇異な土器とされるが、胎土分析では地元産のB類に分類された。砂粒（写真4）は石英基調であり、3mm大の長石がやや多く、金雲母・石英も含む。写真上では、4は1～3と砂粒の入り方と質感が異なることが伺えよう。4の文様はヘラにより6条の重連弧文+2本の斜線文+2条の連弧文・1条の縦沈線を持つようである。底部は充填技法の可能性があり、内面には軽いナデが認められたので、内面の一部は生きている。5～6は3-286土坑出土の舟形木製品である。樹種は全てクルミ属であり、5・6は穿孔を持つので棒か紐が組み合わされていたものと思われる。

8・9は大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡（田中ほか2008、第5図1）出土である。8は浮線文系土器の舟形土器で離山～氷I式古段階であり、胎土には溶岩・砂岩・輝石を含み、長野県の可能性が高いとされた。肉眼観察では、ミガキ調整の為に観察しにくかったが、砂粒（写真5）は粒子が丸い流紋岩基調であり、2mm大の暗灰色砂粒が主体で黒色砂粒を含む。浮線文は太く、文様の段を丸くする程度であり、浮線化していない。また文様の溝底のミガキもシワを残し、ミガキの段を消さないなど、浮線文技法というよりも工字文技法（石川1985）である。口縁部文様帯と胴部文様は、2本の沈線で区画され、口縁部文様帯には浮線文を、胴部文様帯には眼鏡状突帯と王字状文と平行沈線文を持つ。文様帯構成から、離山段階とすれば肩部・胴部文様帯を持つものではなく、氷I式古段階とすれば口縁部文様帯が幅広すぎるし胴部文様帯を持つことはなく、どちらの時期にしても浮線文では文様構成に類例を知らない。9は丸底の底部とされ、生駒西麓産の胎土であるが少量のチャートを含むという。砂粒（写真6）は石英基調であり、2～3mm大の長石・石英が主体であり、他に銀色に発色する鉱物を多く含む。口縁部が生きていることから、舟形土器と思われる。



第1図 西日本の浮線文土器と舟形土器・木器



写真1 (第1図1)

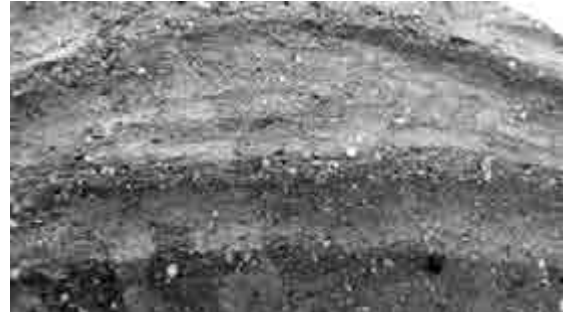


写真2 (第1図2)



写真3 (第1図3)



写真4 (第1図4)



写真5 (第1図8)



写真6 (第1図9)

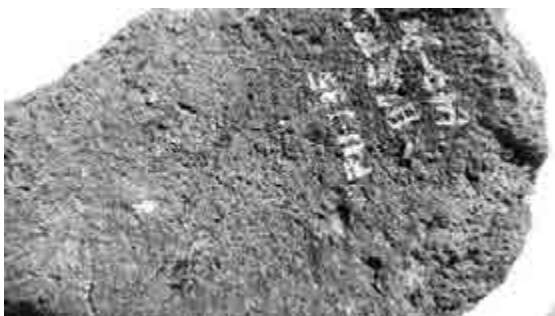


写真7 (第1図10)



写真8 (第1図11)



写真9 (第1図12)



写真10 (第3図12)

第2図 土器の胎土写真

10～12(筆者実測)は鳥取県米子市目久美遺跡出土(第5図2)であり、10は目久美遺跡IV5-F出土(米子市教育文化事業団1995)、11・12は第8次調査出土(佐伯2003)である。10は幅広の沈線を持つ浅鉢であり、文様は工字文・平行沈線文・浮線文かは判断が出来ないが、外面はミガキ・内面はヨコナデが丁寧になされる。砂粒(写真7)は石英基調であり、2mm大の長石が主体であり、次は石英であり乳白色丸石を含む。11は浮線文系浅鉢であり、離山段階と思われる。口縁部と胴部文様帯は沈線で区画し、幅広の文様を持つので北陸地方西部的(設楽2004)である。内外面とも表面は剥離しており、砂粒が良く観察しやすい。砂粒(写真8)は石英基調であり、0.5mm大の石英が主体であり、クリスタルも多い。次に長石が多く花崗岩・白色石を含み、銀色粒子を少し含む。12は浅鉢の体部下半であり、右回りの渦巻き文を持ち、表面はナデ調整で内面は丁寧である。砂粒(写真8)は、表面に見えないが石英基調と思われ、長石・石英・白色粒子が主体と思われ、銀色粒子がやや多い。共に東日本系であるが、砂粒は地元と変わらないことから在地で製作されたものと思われる。

13～15は和歌山県すさみ町立野遺跡(川崎2013・丹野2013)出土である。13は内傾する壺であり、東日本からの搬入土器の一部である。13は肥厚させた口縁部に2条の平行沈線を引き、縦方向の単線を入れて工字文を描いている。頸部に浮線状の突帯があり、斜めの刻みを持つ。外面は横方向のミガキが丁寧になされ、色調は暗灰色であり、胎土は0.5mm程度の白色砂粒を主体として黒色砂粒が微量入る。白色砂粒は丸みが少なく不揃いなものが主体である。ほかに、東海地方から搬入された土器(石英基調)も出土している。多くの木製品が出土した中で舟形木製品の製作工程が復元可能(第1図14)である。樹種はクスノキであり、枝の屈曲部を利用している。15は赤漆塗の飾り弓であり、東日本系と思われる。

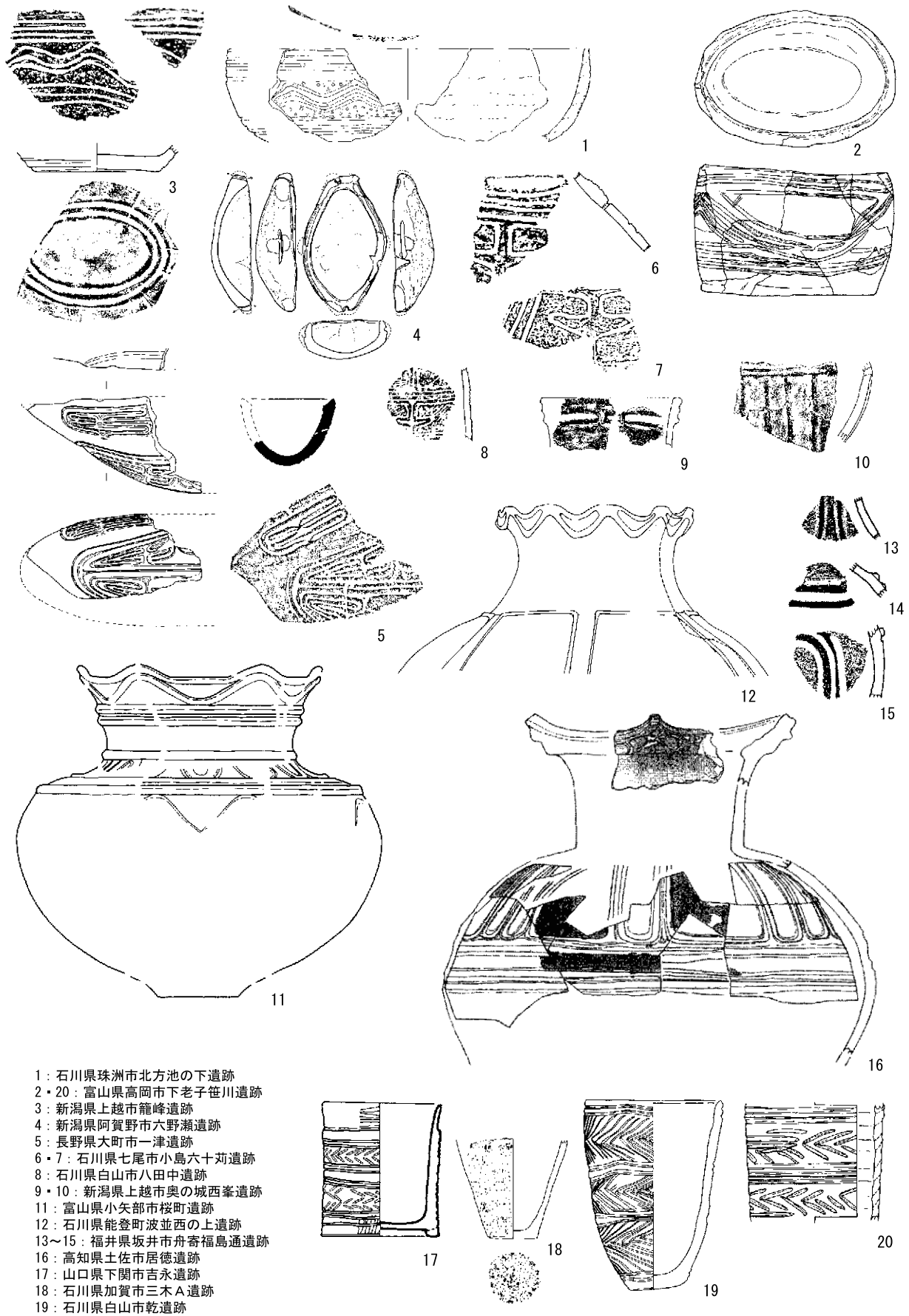
3. 舟形土器の類例

第1図8の砂粒は、長野県産と想定される第1図1～3(写真1～3)や大阪府産とされる第1図4・9(写真4・6)とは写真からも異なることが伺える。また、器形や文様も異なることから類例を見てみたい。まずは舟形器形に注目し、管見にある晩期末の舟形土器を紹介する。

第3図1は、石川県珠洲市北方池の下遺跡(北川2013)出土であり、胴部下半の直線文が拓本の大きく曲った部分から、屈曲している舟形器形である。3本沈線文で上下の区画沈線文の間に山形文と刺突文を持ち、時期は晩期終末とされる。第3図2は、高岡市下老子笹川遺跡(町田ほか2006)出土であり、口縁・体部にある2条の区画沈線文の間に多重連弧文を持つ。時期は笹川IV期(大洞A式併行)とされる。第3図3は、新潟県上越市籠峯遺跡(野村ほか2000)出土の底部であり、体部下半に2条の沈線文を持ち、第1図8の文様に近い。第3図4は、新潟県阿賀野市六野瀬遺跡(石川ほか1992)出土の土製品である。長軸の両端に紐掛け孔があり、短軸の両端にも突起・紐掛け孔が存在した可能性があるという。第3図5は、長野県大町市一津遺跡(島田ほか1990)出土であり、工字文・浮線文状の文様を2段に施文する。

次に第1図8の体部文様である王字状文は、東北地方南部～北陸地方西部に類例があるが、東北地方南部の類例を思いだせなかった。第3図6・7は、石川県七尾市小島六十苜遺跡(土肥ほか1986)出土であり、前期前半と思われる。第3図8は石川県白山市八田中遺跡(久田ほか1987)出土であり、縄文を持つ事から中期初頭と思われる。また、香川県高松市林・坊城遺跡には有文、徳島県徳島市三谷遺跡には無文の舟形土器が存在(小林1999)する。

筆者の管見が北陸地方西部の一部に限定されることから、第1図8の類例を北陸地方西部に求めてしまう傾向がある。砂粒(写真5)の特徴は、福井県越前地方～富山県に認められ、暗灰色・黒色砂



- 1 : 石川県珠洲市北方池の下遺跡
- 2・20 : 富山県高岡市下老子笹川遺跡
- 3 : 新潟県上越市籠峰遺跡
- 4 : 新潟県阿賀野市六野瀬遺跡
- 5 : 長野県大町市一津遺跡
- 6・7 : 石川県七尾市小島六十苅遺跡
- 8 : 石川県白山市八田中遺跡
- 9・10 : 新潟県上越市奥の城西峯遺跡
- 11 : 富山県小矢部市桜町遺跡
- 12 : 石川県能登町波並西の上遺跡
- 13~15 : 福井県坂井市舟寄福島通遺跡
- 16 : 高知県土佐市居徳遺跡
- 17 : 山口県下関市吉永遺跡
- 18 : 石川県加賀市三木A遺跡
- 19 : 石川県白山市乾遺跡

第3図 北陸以西の舟形土器・隆線連子文土器など

粒が主体な場所は、石川県白山・小松市域の手取川・鍋谷川周辺に確認（久田2007）されるが、他の地域や部分的な小地域でも存在する可能性も当然あるので製作地を限定することは出来ない。しかし、第1図8の基本は大洞系土器から生まれたものであり、東北地方やその影響下にある北陸地方・信州地方でも製作可能であるが、長野県産とされる第1図1などとは砂粒が違うことは肉眼観察でも理解できよう。

このような砂粒の違いによる産地の判定は、東北地方の一部で製作された隆線連子文土器（設楽・小林2007）でも可能ではないかと思われる。それは、石川県鳳珠郡能登町波並西の上遺跡の隆線連子文土器（第3図12）の胎土が、地元の砂粒と大きく異なるからである。次に、隆線連子文土器の北陸地方などの出土例（久田2008）や、その後に報告された資料などを紹介したい。

4. 隆線連子文土器の類例

第3図9～16は、東北地方の一部の地域で製作されたとされる隆線連子文土器（設楽・小林2007）であり、東北地方以外で筆者の管見に入った出土例である。第3図9・10は新潟県上越市（旧中郷村）奥の城西峯遺跡（野村ほか2004）出土であり、9は平縁口縁、10は胴部下半であり、同一個体である。他に胴部上半の2破片（未報告資料）が存在する。第3図11は、富山県小矢部市桜町遺跡（大野ほか2006）出土であり、口縁部は7波頂突起であり、胴部上半にはU字状の隆線文を持つ。第3図12は、石川県能登町波並西の上遺跡（平田1976）の土坑から出土した。砂粒（写真10）は、石英（クリスタル）が主体であり、雲母（写真10の黒色粒子）が多量に入る。第3図13～15は、福井県坂井市舟寄福島通遺跡（山本ほか2011）出土であり、東海地方の五貫森式（無文突帯）とされた。これらは実見していないが器形・文様から突帯文系土器ではなく隆線連子文土器と想定した。それは、13は胴部上半、14は胴部上半と下半の区画文様、15はその下に続く部分と想定することが可能であり、11・16と類似している。第3図16は高知県土佐市居徳遺跡（設楽・小林2007、藤方ほか2002）出土であり、搬入土器とされる。また居徳遺跡からはクスノキ製の舟形漆器（佐竹ほか2003）が出土しており、中国大陸製ではなく東日本製（設楽・小林2007）とされた。それは、漆器に隆線連子文土器と共通する隆線があり、北陸系の文様モチーフや朱点を持つことからとである。

5. 筒形容器について

筆者は、弥生前期の綾羅木式系土器の中にある有文筒形土器（第3図17、向上2003）が、北陸地方の19・20との関連があるのではないかと想定（久田2012）した。それは、鳥取県智頭町智頭枕田遺跡の浮線文土器群は信州北部・北陸地方西部から搬入（設楽2004）であり、板付I式の文様が亀ヶ岡式土器の関与（設楽・小林2007）があり、鳥根県松江市西川津遺跡の遠賀川式壺の文様が北陸地方西部との関連で成立（設楽2004）したことが明らかにされたことによる。遠賀川式の筒形土器（第3図17）の筒形や綾杉文が北陸地方との関連があるのではないかと想定したからである。しかし、両地方を繋ぐ資料が不明なままであった。

石川県加賀市三木A遺跡から無文の筒形土器（第3図18、垣内2009）が報告され、昨年ようやく18の類例を知る機会を得た。鳥取県鳥取市本高弓ノ木遺跡において晩期終末の突帯文系無文筒形土器が出土しているのを確認したが、詳細な時期やセット関係は報告書にゆだねるが、浮線文系土器以外にも山陰と北陸地方の関連が伺える例となるであろう。また、石川県野々市市御経塚遺跡（吉田ほか2003）では中国地方系の突帯文土器（久田2012）や九州系玉類（大坪2010）が出土し、八日市新保式系土器は鳥根県出雲市三田谷I遺跡（岡田ほか2000）や岡山県鏡野町久田堀ノ内遺跡（弘田和司ほか

2005-578・719) で出土していることから、中国地方と北陸地方の交流は縄文時代後期末～晩期前半には確実に存在しており、それ以前の様相も少しずつ明らかになりつつある。

6. 晩期末から前期の交流

西日本で出土した土器が何処から運ばれたのかを検討したい。第4図1は、大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡出土(第5図1)で離山～氷I式古段階の長野産とされたが、口縁部文様が広くて胴部文様帯を持つなど長野県産としては違和感があり、胎土的には北陸地方西部的である。第4図4は文様帯構成では氷I式古段階であるが、口縁部・胴部上半・胴部下半の文様帯を持っており、1と近い様相である。また、4の胴部下半の文様は右回りの渦巻き文であり、3と類似する。1・4・12は浮線文系土器であるが、胴部下半の文様は別系統の文様を施文し、5は浮線文土器には施文されない刻みを持つなど、他系統文様の融合が認められる。

第4図15は和歌山県すさみ町遺跡出土の東日本系土器(川崎2013)であるが、在地の土器(2～3mm大の丸い砂粒、黒・灰色主体)や東海地方系の土器の砂粒(長石主体)とは異なる。15の口縁部は、平縁で工字文を持つのは16と類似する。15の刻みを持つ肩部突帯は17・19・20～22と類似し、内傾する器形は14・20・21の浮線渦巻文土器(神村1988)と類似する。15の口縁部文様は、柴山出村式文様であり、肩部の刻みは飛騨・尾張地方の柴山出村式系土器(19藤田2012、22服部ほか1992)や浮線渦巻文土器(17・21岡本2001、湯尻2012)、刻みは浮線文浅鉢(5町田ほか2006)に類例がある。柴山出村式の特徴文様(沈線を伴う縦位の綾杉文)は、2本の縦沈線を中心に幅広く下向きが普通(16)である。しかし石川県以外や時期が下がるものにおいては、文様の幅が狭く、縦沈線文が欠落ないし1本(12・19・21～23)・綾杉文が上向き(22)などの変化が認められる。

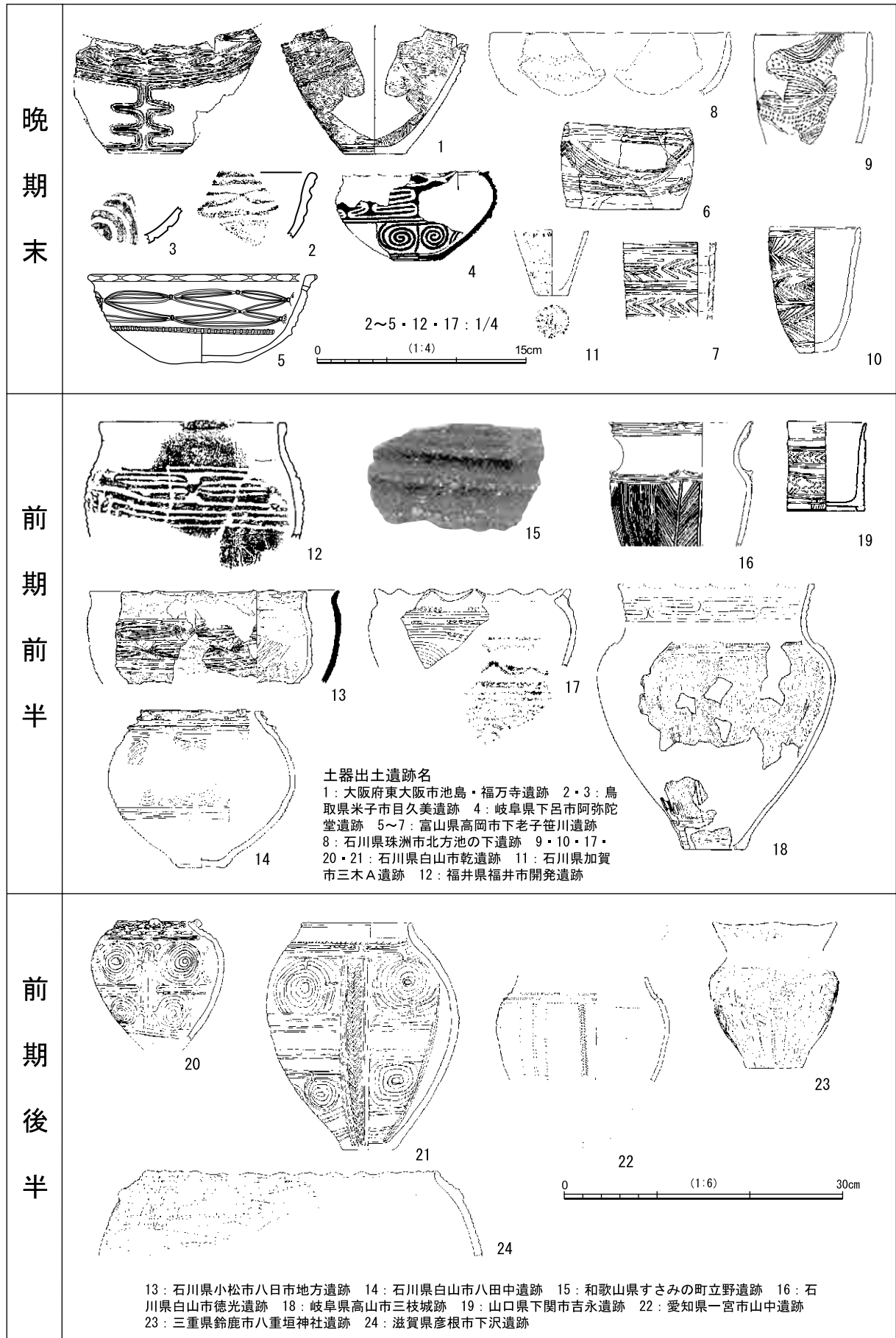
15の胴部片が無いのは残念であるが、器形・文様的には柴山出村式と浮線渦巻文系の融合が認められ、両系統の影響が交わる地域で製作されたものとみなせる。他系統の融合は、4(浮線文+渦巻文)、12(浮線文+柴山出村式、古川2012)、18(浮線文+柴山出村式)、21・24(浮線渦巻文+柴山出村式)があり、下呂市・福井市・高山市・白山市で確認されるので、15の製作地は越前・加賀・越中・飛騨地方を想定出来よう。その中で、白色砂粒が主体なのは、石川県北加賀地方～富山県内に類例を確認しており、富山県に流れ込む河川の上流に位置する飛騨高山周辺も可能性があろう。第4図15の製作地は、飛騨地方を含む北陸西部と仮定すると、和歌山県立野遺跡までの間には、類例などから飛騨・尾張・伊勢地方経由が有力であるが、彦根市下沢遺跡(第4図24、戸塚2012)から滋賀(第5図9)・奈良経由の可能性もあろう。

第4図1・15の製作地は、文様の融合・胎土などから飛騨を含む北陸地方西部の可能性が高いものと想定したい。このように、縄文晩期末～弥生前期にかけて東北地方の土器以外にも舟形土器・容器や筒形土器、北陸地方西部系の土器が西日本で出土していることが明らかとなった。

7. おわりに

近年、東日本系の土器・木器・漆器などが縄文時代晩期後半～弥生時代前期にかけて、西日本での出土が確認され、東北地方系以外にも北陸地方西部系も認識されるようになりつつある。これらの土器には、搬入されたものや在地で模倣されたものもあることから、土器の系譜の解明には、文様だけではなく胎土(砂粒)の差に注目することによって、製作地などを認識することが可能となり、当時の人々の交流関係を少しでも明らかに出来るものと確信している。

最後に、本稿をまとめるにあたりお世話になった方々の氏名を記して終わりにしたい。



晩
期
末

前
期
前
半

前
期
後
半

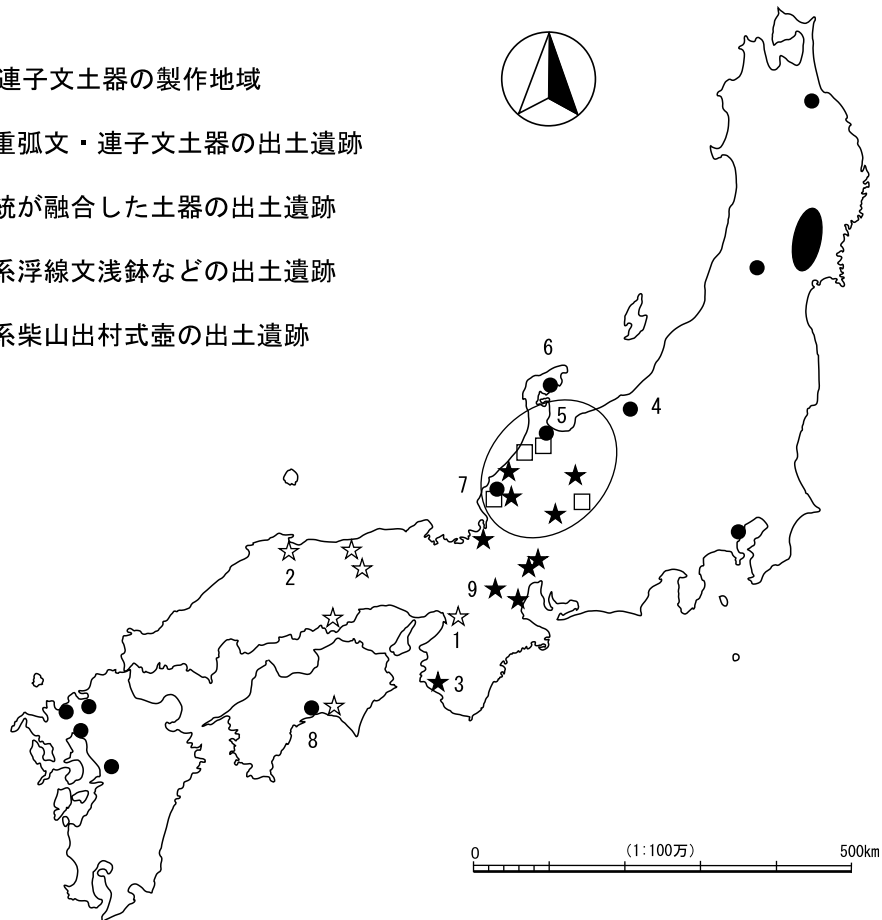
土器出土遺跡名
 1：大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡 2・3：鳥
 取県米子市目久美遺跡 4：岐阜県下呂市阿弥陀
 堂遺跡 5～7：富山県高岡市下老子笹川遺跡
 8：石川県珠洲市北方池の下遺跡 9・10・17・
 20・21：石川県白山市乾遺跡 11：石川県加賀
 市三木A遺跡 12：福井県福井市開発遺跡

13：石川県小松市八日市地方遺跡 14：石川県白山市八田中遺跡 15：和歌山県すさみの町立野遺跡 16：石
 川県白山市徳光遺跡 18：岐阜県高山市三枝城跡 19：山口県下関市吉永遺跡 22：愛知県一宮市山中遺跡
 23：三重県鈴鹿市八重垣神社遺跡 24：滋賀県彦根市下沢遺跡

第4図 北陸地方西部系土器の変遷

凡例

- 隆線連子文土器の製作地域
- 隆線重弧文・連子文土器の出土遺跡
- 他系統が融合した土器の出土遺跡
- ☆ 北陸系浮線文浅鉢などの出土遺跡
- ★ 北陸系柴山出村式壺の出土遺跡



第5図 東日本系土器の出土地点

敬称省略。石川日出志、大野 薫、岡戸哲紀、亀島重則、川崎雅史、佐伯純也、戸塚洋輔、丹野 拓、中沢道彦、野村忠司、濱田竜彦、藤田慎一、古川 登、三宅正浩、大阪府教育委員会、大阪府文化財センター、香南市文化財センター、福井市教育委員会、和歌山県文化財センター、米子市教育文化事業団

参考文献

- 石川日出志 1985 「中部以西の縄文晩期浮線文土器」『信濃第37巻第4号』信濃史学会
 石川日出志 1995 「工字文から流水文へ」『みずほ第15号』大和弥生文化の会
 石川日出志ほか 1992 『六野瀬遺跡1990年調査報告』安田町教育委員会
 岡田憲一ほか 2000 『三田谷Ⅰ遺跡 Vol. 3』島根県教育委員会
 岡本恭一 2001 『乾遺跡』石川県埋蔵文化財センター
 大坪志子 2010 「縄文時代九州産石製装身具の波及」『先史学・考古学論究V—上巻』龍田考古会
 大野淳也ほか 2006 『桜町遺跡—縄文土器・石器編Ⅰ第3分冊』
 垣内光次郎 2009 『加賀市 三木A遺跡』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
 神村 透 1988 「浮線渦巻文土器」『条痕文系土器文化をめぐる諸問題—資料編Ⅱ・研究編』愛知考古学談話会
 川崎雅史 2013 「立野遺跡の発掘調査と土器」『農耕社会成立期の木工—立野遺跡を考える—資料集』和歌山県文化

財センター

- 北川晴夫 2013 『珠洲市 北方池の下遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 小林青樹 1999 『縄文・弥生移行期の東日本系土器』国立歴史民俗博物館
- 佐伯純也 2003 『目久美遺跡Ⅷ』米子市教育文化事業団
- 佐竹寛ほか 2003 『居徳遺跡群Ⅳ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 設楽博己 2004 「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根県考古学会誌』第20・21集合併号 島根県考古学会
- 設楽博己・小林青樹 2007 「板付Ⅰ式土器における亀ヶ岡系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』雄山閣
- 島田哲男ほか 1990 『一津』大町市教育委員会
- 戸塚洋輔 2012 『下沢遺跡Ⅰ』彦根市教育委員会
- 田中龍男ほか 2008 『池島・福万寺遺跡5』大阪府文化財センター
- 丹野 拓 2013 「立野遺跡の木製品」『農耕社会成立期の木工—立野遺跡を考える—資料集』和歌山県文化財センター
- 土肥富士夫ほか 1986 『小島六十苜遺跡』七尾市教育委員会
- 中尾智行ほか 2009 『讃良郡条里遺跡Ⅷ』大阪府文化財センター
- 新田 剛 2010 『八重垣神社遺跡(第6次)』鈴鹿市考古博物館
- 野村忠司ほか 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ—遺物編』中郷村教育委員会
- 野村忠司ほか 2004 『奥の城西峯遺跡』中郷村教育委員会
- 服部信博ほか 1992 『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 藤田英博 2011 「三枝城跡の柴山出村系土器」『三枝城跡』岐阜県文化財保護センター
- 古川 登 2012 『開発遺跡』福井市教育委員会
- 平田天秋 1976 『波並西の上遺跡』石川県教育委員会
- 久田正弘ほか 1987 『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2007 「混和材からみた土器の移動について1」『石川県埋蔵文化財情報』第17号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 2008 「北陸地方の農耕社会の形成」『弥生ムラの風景』石川県立歴史博物館
- 2012 「石川県を中心とした縄文時代晩期中葉から後葉の土器編年について」『石川考古学研究会々誌』第55号 石川考古学研究会
- 町田賢一ほか 2006 『下老子笹川遺跡』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 弘田和司ほか 2005 『久田堀ノ内遺跡』岡山県古代吉備文化財センター
- 向上昭彦ほか 2003 『吉永遺跡(V地区)』山口県埋蔵文化財センター
- 藤方正治ほか 2002 『居徳遺跡群Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 山本孝一ほか 2011 『舟寄福島通遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 湯尻修平 2012 「北陸西部の浮線文土器(その1)」『石川考古学研究会々誌』第55号 石川考古学研究会
- 吉田 淳ほか 2003 『御経塚遺跡Ⅲ』野々市町教育委員会
- 米子市教育文化事業団 1995 『目久美遺跡Ⅳ』

石川県埋蔵文化財情報

第30号

発行日 2013(平成25)年9月30日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本確文堂

© (公財)石川県埋蔵文化財センター